

第 1 章 修道院のガーデニング [下線部は『都市緑化技術』No.113 掲載箇所 赤字は掲載後の訂正箇所]

“Forsitan, et pingues hortos quae cura colend
Ornaret, canerem, …” おそらく、私は豊かな庭園のことを歌っているであろう
どうすればこの庭園を美しくできるであろうかと

Virgil, Geor., iv.118.

ウェルギリウス『農耕詩』第 4 118 行

イングランドにおける庭園の歴史は人々の歴史とともに一歩ずつ歩んできた。平和で豊かな時代には庭園は増加し繁栄し、戦争と混乱の時代には沈滞した。この国を支配した様々な民族や統治した支配者が違えば庭園もはっきりと違いがわかるほど影響を受けてきた。したがって、イングランドにおける庭園の歴史をたどる時、当時造られた庭園の上にスタンプのように残された国民性や外国との関係に見られるその時々の人々のことを見失ってはならない。

ローマによる征服以前において、英国 Britain では庭園の名に値するものは存在しなかった。古代ブリトン人 the Britons はオーク oak [訳注] を崇拝し、ヤドリギ mistletoe を神聖なものと扱い、タイセイ [大青] woad*の染料を体に塗ったことは知られているが、これらの植物あるいは他のいかなる植物もこれらを育てるために彼らが何か努力したかという、そのような事実はまったく知られていない。この国における園芸の歴史がローマ人が来る前に始まっていたとは到底言えない。他の科学分野と同様にこの分野においても、ローマ人ははるかに進んでおり、彼らが他の国に追い越される、あるいは肩を並べられるまでにはさらに数世紀を要した。

*ベーカー氏によるとタイセイ woad は英国には自生していない。

[訳注：オークはカシと混同されることがあるが、典型的には落葉樹のナラ類である]

古代ブリトン人は現代人にもなじみのある野菜のほとんどを栽培していた。大プリニウス Pliny the Elder [23~79 年 古代ローマの将軍・博物学者] は、ローマにおいては「ガーデンとは貧しい人の耕作地そのものであり、下層階級が日々の食料を得るのはガーデンからであった」と語った。金持ちは庭園の豪華さや華美に耽り、野菜や果物は莫大なコストをかけて自分たちのために育てられたが、社会が全体としてその恩恵を享受するということとはなかった。ただし、今なお広く一般的に使われている野菜のほとんどは、すべての階級の人々にとって普通の食べ物であり、そしてその多くのものはローマ人によってこの国にもたらされたものである。そのうちいくつかのものはこの土によく馴染み、極めてしっかりと根付いたものは、ローマ文明が衰退しても生き残ることができた。その興味深い一例としてセイヨウイラクサ stinging-nettle の一種は、言い伝えによると貴重な鉢植えのハーブとしてローマ人により持ち込まれたものである。

タキトゥス Tacitus [1~2 世紀頃 ローマ帝政時代の歴史家・政治家] が 1 世紀に書いたところによると、英国の気候はオリーブ olive とブドウ vine を除きすべての野菜と果物に適し

ていると述べている。その後ほどなくブドウでさえも栽培され、ある程度成功したように見える。西暦 280 年頃、皇帝プロブス Probus [Marcus Aurelius~, 232 ~ 82 年] は英国におけるブドウ畑の栽培を推奨したと一般に信じられている。プリニウスによると 1 世紀半ばまでにサクランボ [セイヨウミザクラ] cherry が持ち込まれたとされるが、この果物はこの国では土着していたから、これは多分若干改良された品種のことであろう。

英国におけるローマ人の庭園はヨーロッパ大陸のものと同じように立派なものであったと想定することはできない。この国の庭園は、プリニウスの別荘やローマ付近の皇帝の別荘に見られるようなテラス、噴水、そして彫像が配置された手の込んだ庭園のように造られることはほとんどなかった。しかしながら、イングランド各地で発見されたローマ人の家や別荘の遺跡は帝国の他の地域で発見されたものと極めて似ているため、それらに付属していた庭園もイタリアやガリアのものでできるだけ同じような形で設計されていたであろうということは疑いがない。イングランド南部には、ローマから 17 マイルのところにあった「ラウレンティナ別荘」と同じように、イチジク figs とクワ mulberries、ツゲ box とローズマリー rosemary が生育できるような安全な場所 sheltered spot がたくさんあった。そこでは「スミレ [ニオイスマレ] violets [訳注] の香りのするテラス」、這いまわっているブドウやツタ ivy、あるいは動物や文字の形に風変わりに刈り込まれた木の中にバラ roses が一杯に埋め込まれている生垣は場違いとは見えなかったであろう。もし英国におけるローマ人の庭園がこのようなものであったなら - そしてそのことはローマ人による別荘、モザイク模様の床、風呂、道路、橋の遺跡を見れば疑いようもないことだが - 、それはわが島国において同じように美しい庭園を再び目にする優に 1000 年も前のことであった。

[訳注：香りのよいスミレは、ニオイスマレ、スイートバイオレットと呼ばれ、本書第 4 章 *Plants from "The Feate of Gardening"* の植物学名の一覧表 (p.76) においても、Violet (*Viola odorata*) と記載されている。日本の固有種 *Viola mandshurica* とは区別されるが、本訳においては単にスミレと訳す。]

ローマ帝国の没落とその後の蛮族の侵入により、ガーデニングに対してもほかの平和的な芸術と同じく致命的な打撃が加えられた。英国におけるローマ支配が終わった後の嵐のような年月の間に園芸に関するほぼすべての知識は死に絶えてしまったに違いない。完全に同化し順応してしまった植物だけが適切に栽培されない状態でも育ち続ける強さを持っていたのであろう。

ラテン語に遡ることができるいくつかのサクソン語の植物の名前により、どの植物が寒さの中でも生き残ったかを特定できそうであり、あるいは少なくともアングロサクソン人がローマの植物の名前の多くのもに通じていたことを示しているとも言えよう。以下のリストはアール氏 Earle [John, 1824 ~ 1903 年 オックスフォード大学教授 (アングロサクソン語)] による『植物の英語名』 *English Plant Names* によるが、これらはラテン語を語源とすることを明確に示している。

ラテン語	アングロサクソン語	英語	[和名]
Amigdala	Magdula treow	Almond	アーモンド
Beta	Bete	Beet	ビート
Buxus	Box	Box	ツゲ
Cannabis	Hænap	Hemp	麻
Caulis	Caul	Kale	ケール(キャベツの一種)
Coliandrum	Celendre	Coriander	コリアンダー(セリ科)
Coh o erophyllum	Cerfille	Chervil	チャービル(パセリの類)
Castanea	Cisten beam*	Chestnut	栗
Cornus	Corn treow	Cornel	ミズキ類
Crotalum	Hratele	Yellow rattle	イエローラトル
Cuminum	Cymen	Cummin	クンミン
Cerasus	Ciris beam*	Cherry	サクランボ
Febrifugia	Feferfuge	Feverfew	ナツシロギク
Ficus	Fic beam*	Fig	イチジク
Feniculum	Finul	Fennel	フェンネル[ウイキョウ]
Gladiolum	Glædene	Gladden	グラジオラス
Lactuca	Lactuce	Lettuce	レタス
Laurus	Laur beam*	Laurel	月桂樹
Linum	Lin sæd	Linseed	亜麻の種子(アマニ)
Lilium	Lilige	Lily	ユリ
Lubestica	Lufestice	Lovage	ラビッジ(セリ科)
Malva	Mealwe	Mallow	マロ [ゼニアオイ]
Morus	Mor beam*	Mulberry	クワ
<u>Mentha</u>	<u>Minte</u>	<u>Mint</u>	<u>ミント</u>
Nepus	Naep	<i>Tur</i> -nip	カブ
Papaver	Popig	Poppy	ケシ類
Percica	Persoc treow	Peach	桃
Petroselinum	Petersilie	Parsley	パセリ
Pirus	Pirige	Pear	梨
Porum	Por leac	Leek	ネギ
Prunus	Plum treow	Plum	プラム
Radix	Raedic	Radish	ラディッシュ(大根)
Rosa	Ro-sē	Rose	バラ
Ruta	Rude	Rue	ヘンルーダ

Sinapi	Senap	Mustard	カラシナ
Unio	Yul leac	Onion	タマネギ
Ulmus	Ulm treow	Elm	ニレ
Vinea	Win treow	Vine	ブドウ

*Beam とは、ドイツ語の“Baum ” バウムと同じく、生きている木のこと

サクランボ、キャベツ cabbages、レタス lettuce、ネギ leek、タマネギ onion、大根 radish、バラ、パセリ parsley のようないくつかの植物はこの国で引き続き育ったのかも知れない。ただし、ローマの時代に英国で栽培された多くの種 species は、チュートン人が侵略した時代に完全に失われてしまったので後の時代になってイングランドに再び持ち込まなければならなかった。ヨーロッパ大陸においてもローマ帝国の解体後に同じような状況が生まれ、園芸の復活はキリスト教の拡大と修道院 monasteries の設立が行われる数世紀の後まで待たなければならなかった。

この国においても園芸の復活は同じ理由によるものであり、イングランドの歴史の初期においては、疑いなく修道士たち monks が、社会のいかなるほかの階級の人々よりも園芸に関する優れた技術を持っていた。それは彼らの生活が置かれている環境がその優越性を維持する方向に働いていたからである。彼らは静かな生活を送り、ひどく戦争に邪魔されることもなかった。またほかの建物が破壊され荒らされた時にも、修道士の建物は大事にされた。彼らの多くが技術と知性を有しており、本からだけではなく大陸との交流を通じて、どのような植物を育てたらよいか、どのように育てたらよいかを学ぶことができた。

大陸における庭園に関する最も初期の記録（ローマの時代以降）は 9 世紀に遡る。カール大帝 Karl the Great [シャルルマーニュ, 742~814 年] の時代、サンジェルマン・ドゥ・ブレ Saint Germain des Près、サンアルマン Saint Armand、サンレミ Saint Remy の大修道院 Abbey の荘園のリストの中に、様々な庭園についての記述がなされている*。

*ゲラルド編『サンジェルマン・ドゥ・ブレ大修道院長イルミノン土地台帳』パリ 1844 年 *Polyptyque de l'Abbé Irminon*. Ed. By M.B.Guérard

ほかの場所、たとえばピカルディー Picardy のコルビー Corbie や、コンスタンツ湖に近いザンクトガレン St. Gall では、庭園が存在していたことについて、ちょっとした言及があるところではない、明確な記録が残されている。コルビーの庭園は大変大規模なもので 4 つに分かれている、と言うか明確に 4 つの庭園に区切られており、それを整えるために、鋤が使われた。その鋤は、毎年何人かの賃借耕作者 tenants から寄進されたものだが、別の賃借耕作者たちは、修道士たちによる草取りや植栽を手伝うために 4 月から 10 月まで人を出さなければならなかった（*ゲラルド編『サンジェルマン・ドゥ・ブレ大修道院長イルミノン土地台帳』パリ 1844 年）。ザンクトガレンでは、「庭」hortus は長方形の囲われた土地で、中

央に道がある。その道の一方の端には庭師の家と農機具や種子を置く小屋が位置し、そこから道は延びてきており、その両側には、9か所、同じ大きさの細長い苗床 beds が配置されている。「薬草園」herbularis はそれよりは小さく、壁沿いにぐるりと植物で囲われて、中央の道の両側に苗床が4か所、そしてその中に植えられている植物は丁寧に記録されていた（↑『考古学研究所ジャーナル』第5巻 *Archæological Institute Journal* ）。

イングランドでは、このような正確な記述というものは、どの庭園についても残されていないが、いろいろな修道院の記録を注意深く検証してみれば、11世紀および12世紀において、さらにはそれより以前の庭園や果樹園の存在が証明できることになる。

庭は修道院にとって最も基本的な付属物であり、それは野菜がその住人が毎日食べる食事の大きな部分を占めていたからだ。したがって修道院が建設されると同時にその周りに庭が造られたに違いなく、そしてこれらの庭は、当時の王国において、庭という名に値する、多分ほとんど唯一の庭であった。とは言い、そこに植えてある植物の数は極めて限られており、そして多分、大陸で栽培されていた多くの植物はまだこの国には入ってきいていなかった。修道士たちは海外から植物を受け取っていたかも知れず、それは大陸における宗教的な施設と一定のつながりを持っていたからだ。そして自分たちの修道院や教会のために宝物を持ち帰った時、その庭が忘れられることはなかったであろう。しかし、植物は主に薬として持って帰られ、それは乾燥した状態で輸入されたと推察されるが、それは英語の drug 薬という単語が、アングロサクソン語の動詞 “drigan”、dry [乾燥させる] から来ていることから明らかだ。

この国で修道院が設立されて間もなく、伝道修道士たちは大陸に住むチュートン人を改宗させるために出かけて行った。アール氏が示すところによると、古英語と似ている名前のドイツ語名の植物のいくつかは、語源が同じというのではなく、それらの植物の効用に関する知識を携えて行ったサクソンの伝道師たちの言葉に由来するということである*。

*オオバコ属 *Plantago* のドイツ語は “Wegbreit”、アングロサクソン語では “Waegbroede”。カモミール の古ドイツ語は “meghede”、アングロサクソン語では “magede”

庭 garden を意味する古い単語は “wyrzgerd”、植物の場所、あるいは “wyrttun”、植物の囲い地であった。また、“ortzgerd”や“orceard”の形は、私たちが今使う英語の orchard 果樹園と同じだが、その意味は、今では果樹が植えられている囲われた土地に限定されている。“Wyrz”または“wurt”はあらゆる種類の野菜やハーブを表す単語として使われ、現代の単語である植物 “wort”と同じであり、これはセイヨウオトギリソウ “St.John’s Wort” (“herb John”) というように多くの植物の名前の接尾語となっている。時には特別の植物がほぼすべての囲い地を埋め尽くしたので、キッチンガーデン [台所用菜園] は、時折「ネギの庭」“leac tun”とか“leek enclosure”と呼ばれた。リンゴ園のことを昔は “appultun”とか“appluzerd”と言い、今でも “appleyard”と言うが、サクランボ園のことは今は cherry orchard、昔の言葉では同じように簡単に “cherryzard”と言った（↑庭師

の会計簿 Gardener's Accounts, ノリッジ修道分院)。修道院の庭の一部は花は育てないで草が植えられ *graszerd* と呼ばれ、同様に回廊に囲まれた空間は “*cloysterzerd*” と呼ばれた。現代の言葉である *garden* は、この *zerd* という言葉の別の形である *garth* あるいは *yard* であり、これらすべては囲まれた土地を意味するアーリア系の語源から由来している。

このように初期の段階、さらにはこれに続く何世紀にもわたり、庭には主に実用的な目的のために植えられ、野菜やハーブ類は薬用や日常の食用のために育てられた。花の咲く植物はその美を鑑賞するためだけにほんの例外的に植えることが許された。とは言え、明るく可愛いらしい花は庭の囲いの中に必ずしも居場所がなかった訳ではなかった。バラ、ユリ *lilies*、スミレ、シャクヤク *peony*、ケシ類 *poppies* などこれに類するものは、すべて薬として使用され、ゆえに除け物にされることはなかった。

花の持つ美しさはほとんどすべての人が喜ぶものであり、最も混乱していた歴史の初期にあっても心を和らげる効果を持っていたであろう。ウィリアム・ルーファス William Rufus [ウィリアム 2 世 (赤顔王) 在位 1087~1100 年] について素敵な物語がある。この物語により、彼の王政は、いわば少しの間とは言え、波乱に満ちた治政の間に起きた多分ほかのいかなる出来事よりも、より優しい光に包まれたものとなった。イーディス Eadgyth すなわちマチルダ [1080 頃~1118 年] は、後にヘンリー 1 世 [在位 1100~35 年] の妻となるが、ラムジー女子修道院 the convent of Romsey で教育を受け、そこでは叔母のクリスティーナが院長 Abbess を務めていた。彼女が 12 歳の時、赤顔王 Red King は彼女に会うことを望んだ。ある日、院長は国王とその家来が門のところで中に入れるよう求めていることを聞き動揺した。この善良なる女性は、子どもに対する良からぬ企みを心配し、彼女に修道女 nun のベールを被せた。そして院長は国王に対して扉を開け、国王は「バラやハーブの花を見るふりをして」中に入った。この荒っぽい国王がかくして花を検分している間に、修道女たちが庭を通り抜けるように院長は指示した。ほかの者たちに混じりベールに包まれて現れたイーディスが通っていくのを国王は許し、そして静かに国王は出て行った*。この話は院長によってアンセルム Anselm [1033 頃~1109 年 カンタベリー大司教] に伝えられ、それをエアドメア Eadmer [1060 頃~1126 年頃 歴史家・神学者] に話したので、この素晴らしい絵画的な場面が歴史の中に刻まれることとなった。

*ミニャ 『教父学全解』 159-160 巻 12 節「エアドメア」427 ページ Migne, *Patrologiae cursus completus*, “Eadmer”、同じく ドウ・アシェリ 『拾遺集』 第 2 巻 (パリ 1723 年) 893 ページ D’Achery, *Spicilegium*, フリーマン 『ウィリアム・ルーファス』 第 2 巻 32 ページ Freeman, *Wm. Rufus*

「そして王はバラとほかのハーブの花を見るために私たちの回廊に入ってきた」

“Rex siquidem propter inspiciendas rosas et alias florentes herbas, claustrum nostrum ingressus.”

クリスティーナ院長が回廊に囲まれた庭をバラやハーブの花で飾る中で、ほかの修道院も同じように美しく飾られた。イーリー Ely [ケンブリッジシャー州東部の町] の筆頭大修道院長 Brithnodus は植栽と接ぎ木の技術でその名を知られ、大修道院の周りに果樹園や庭を

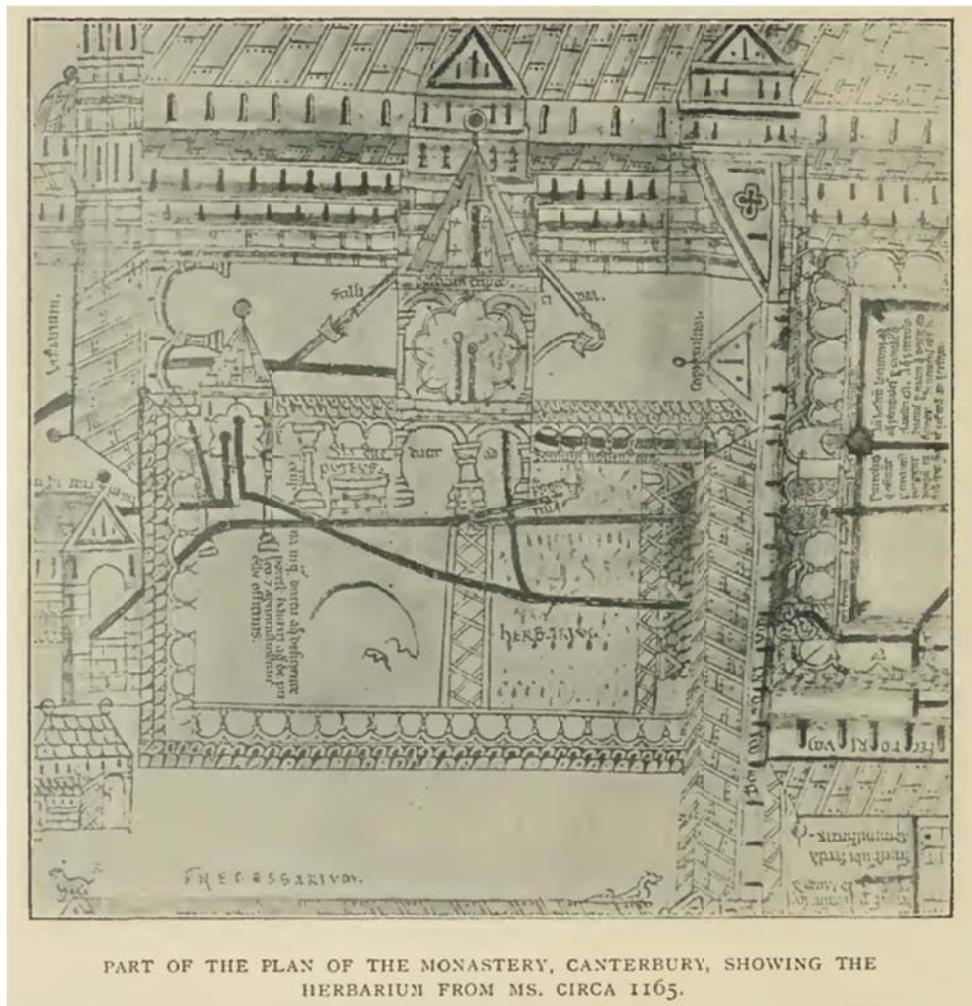
造って大修道院を改善した†。

†ゲイル『ブリテンの歴史』「イーリーの歴史」第2巻第2章 1691年 Gale, *Historiae Britannicae* “Hist. Eliensis” [『イーリーの本』 *Book of Ely Liber Eliensis* は12世紀にイーリー大修道院で書かれたイングランドの年代記・歴史、全3巻、著者不詳]

イーリーには彼の時代(12世紀)の前から庭はあったようで、それは次のような変わった話からイーリー付近にはある種の庭が存在していたことがうかがえる。それは聖エセルドゥレーダ St. Etheldreda [イーストアングリアの王女 イーリーの創設者・女子修道院長]の墓に刻まれている数々の奇蹟のうち‡、一人の少女の手がどのようにして治ったかに関連している。彼女はある聖職者の召使いであり、「日曜日に庭でハーブを摘んでいた。その時、手に木の棒を持って、法に反してその棒でぐいとハーブを摘み取ろうとしたところ、その棒が(彼女の手)に固くくっついてしまって5年もの間誰もそれを引きはがすことができなかったが、聖エセルドゥレーダの功德で(彼女は)救われた」。聖人は679年に亡くなり、この話には歴史的価値は何もないものの、そのような伝説を語り継ぐ意味があることは間違いない。

‡ダグデイル『イングランドの修道院』第1巻473ページ(新編) Dugdale, *Monasticon* (new ed.)

この国における最も初期の修道院の庭の眺めは、カンタベリー Canterbury の修道院の建物の配置図、すなわち鳥瞰図に見られるもののようであったと思われる。それは1165年頃に作られたもので、エドウィンの大詩篇 Great Psalter of Eadwin とともに綴られて、今はケンブリッジ大学のトリニティカレッジ図書館に保管されている。



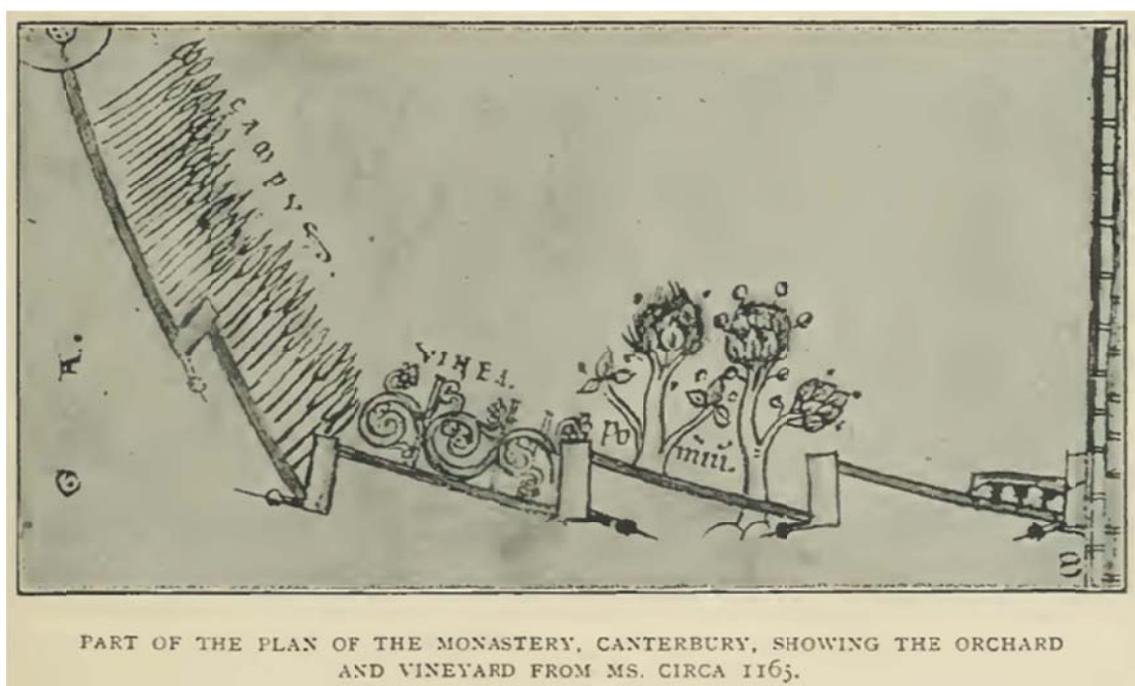
[図 1 - 1] ハーブ園が描かれたカンタベリーの修道院の配置図の一部
(写本より 1165 年頃)

これらの図面は修道院の水道及び排水システムを記録するために（おそらく技術者の Wibert かその助手らによって）作成されたようである*。その一枚にはハーブ園が、宿舎と診療室の間のスペースの半分を占めて描かれており、それは回廊によって囲まれている；他の図面には、壁の外側に果樹園とブドウ畑が広がっている。最初の図面には養魚池 fish pond の近くの壁の内側に樹木も記されている。その後の時代には養魚池の向う側にさらに壁が建設され、そこには後に古い女子修道院の庭として知られることになる場所を含み、その土地は 1287 年から 1368 年の間に数区画まとめて取得されたものであった。大回廊の西側には別の果樹園および大司教 Archbishop の宮殿から望める庭があったはずだが、これらは同じ時代に存在していたにもかかわらず配置図の範囲の外とされた。と言うのは、これらはトマス・ベケット Thomas Becket [訳注] の生涯の最期の場面（1170 年）に関連していたからである。

* 『カンタベリー・クライストチャーチ修道院の建築の歴史』 *Architectual Hist. of the Mon. of Christ*

Church, Canterbury. ロバート・ウィリス師 The Rev. Robert Willis, M.A., F.R.S. 『ケント考古学』第7巻 1868年 *Archeologia Cantiana*.

[訳注：大法官（1155～62年）、カンタベリー大司教（1162～70年）、ヘンリー2世の聖俗両界の支配に反対して殺された。]



[図 1 - 2] 果樹園とブドウ畑が描かれたカンタベリーの修道院の配置図の一部
(写本より 1165 年頃)

ベケットの殺人者どものすぐ後に騎士たちは「庭の大きなサイカモアカエデ [セイヨウカジカエデ] sycamore の木の下にマントとガウンを投げ捨て鎧姿に刀を腰に着け」、そして武装した男たちは果樹園に集められたが、これは教会の方に飛ぶように逃げていくベケットとそのお供の坊さんたちが、いつもの通り道である教会の西端にある果樹園を通らないで、回廊の後ろの小さなドアを通らざるを得ないように仕向けるためであった (*『カンタベリー歴史記録』スタンレー主席司祭 *Hist. Memorials of Canterbury* Dean Stanley)

このような初期の記録はほとんど今に残されてきていないが、修道院の生活は急に変わることはなく、また多分 14 世紀の庭は 12 世紀のものほとんど変わらなかった。これらの庭に関するより完全な知識を得るためには、文字による説明が始まる時まで 2 世紀を費やさなければならない。14 世紀になると研究に必要なより多くの資料が入手できるようになる。詳細については想像によって補うしかないが、これらの庭の管理に関する概要は明確になる。

修道院の中の各部署は規則正しい秩序立った方法で運営され、管理者 officer により統括

され、各部の会計は誰が行うか、誰が管理の責任者であるかなど予め決められた義務を果たすこととされた。そこには Gardener あるいは Hortulanus、Gardinarius と呼ばれた庭師、あるいは庭の管理人 Garden Warder が置かれたが、それは施物分配係 Almoner、聖具保管係 Sacristan、音楽監督 Precentor その他の管理者が置かれたのとまったく同じことであった。

いくつかの事例では、庭師の会計簿が保存されており、ガーデニングに関するその他の記述が様々な記録文書の中に散在している。2 つある非常に完璧な文書としては、ノリッジ修道院 Norwich Priory とアビンドン大修道院 Abingdon Abbey のものがあり*、これらは間違いなく大多数の修道院における庭師の会計簿の適切な事例と言えるものである。アビンドンには 4 つの会計簿があり、一番初期のものは 1369~70 年のものである。ノリッジのものはもっと数が多く、約 30 巻に及び、一番初期は 1340 年、最後が 1529 年であり、15 世紀初頭の状況がよくわかる。

*ノリッジのものは写本のみである。アビンドンのものはカムデン Camden 協会により発刊されている。リチャード・エドワード・ジェン・カーク『アビントン大修道院管理僧会計簿』1892 年 R.E.G. Kirk, *Accounts of the Obedientiars of Abington Abbey*

これらの会計簿からは管理部門の収入支出、修繕費用、少しばかりの生産物を売却したことによって受け取った金額がわかるが、栽培のプロセスについては明らかではなく、栽培されていた植物を特定することもできない。

他の管理人たち、あるいは管理僧 obedienitars と同様に、庭師は仕事の手伝いをする「助手」famulus を抱え、また労働者を雇うことが認められ、その支払いのための資金は小さな土地、あるいは管理部門の所有である家の賃料から賄われた。ラムゼー Ramsey 大修道院では†、庭に 2 人の「助手」がおり、その支払い（西暦 1170 年頃）は「それぞれパン 14 個」と 2 エーカーの土地であった*。しかし、各種の少額の賃料や庭の生産物で余ったものの売上金、それに庭を管理する管理部門所有の土地で作られた穀物の売上金にもかかわらず、会計簿は右の貸方が常にバランスするという訳にいかず、収入が支出をカバーできないことは珍しくなかった。

†『ラムゼー修道院記録文書』ウィリアム・ハート *Cartularium Monasterii de Rameseia*, Wm. Hart. 修道院管理人名簿 List of Monastic officers.

*ダラム Durham 修道院では支払いは「庭師 Robert Kyrvoir に年間 5 シリング」が、その他のこまごました少額の支払い、約 5 シリングとともになされた（『ダラム家計簿』*Durham Household Book*, サーテーズ協会 Surtees Society.）

初期の頃、修道士たちの働き方は比較的優れていたように思えるし、ともかくより注意深く管理していたようである。それは、庭の支出が賄っていたことからわかる。しかし、ノリッジでは時が経つにつれ、管理部門は次々と借金まみれになっていった。1429 年「支

出が収入を上回る、8 ポンド 2 シリング $8\frac{1}{2}$ ペンス」、1431 年の赤字は 13 ポンド 16 シリング $8\frac{3}{4}$ ペンスである。そこで新しい計画が始まり、庭はウィリアム・ドレイパー何某に貸し出され、彼はそこで農業をするため 40 シリングを支払った†。このような状況はこれらの会計簿に記載されている期間の最後まで続くことになった。以下に示すところのものは、これらの書類からの写しであり、大部分はラテン語から翻訳してあるが、引用符の付いた単語は原典のとおり表記されている。

†記載例としては、

1471 年 収入「ジョン・ブル マーに 20 年間賃貸された大庭園から 25 シリング、今年は 6 年目」

1487 年「Robert Castyr より大庭園の農場に関し 26 シリング 8 ペンス、彼に 10 年間賃貸されたもので今年は 2 年目」

最も初期の書類、西暦 1340 年のものを完全な形でここに掲載することとする。

クラクストン修道分院長ダン・ウィリアムの第 14 年における同志 Peter de Donewich の庭の会計簿
収入 -

前会計からの繰越残高 73 シリング 8 ペンス

統制賃料、すなわちネドル通りに 1 店舗所有のアダム・ギルバートから 18 ペンス - 木の束“fagot”枝と根、28 シリング $2\frac{1}{2}$ ペンス - [細くしなやかな枝の] ヤナギ類“osiers” (の) 若い小枝、13 シリング 4 ペンス - 材木“Stamholt and wrong”、9 シリング 8 ペンス - 干し草、36 シリング 10 ペンス - 豆、15 ペンス - ハーブ、13 ペンス - ニンニク、11 ペンス - リンゴと梨、13 シリング $4\frac{1}{2}$ ペンス - “Sandice” (ビャクダン *Sandal wood* ?) 5 シリング 6 ペンス - 卵、14 シリング - 麻の実“hempsede”、1 ペンス - 蠟、9 シリング 7 ペンス - 飼料“forage”、2 シリング - “lapp”、3 シリング

収入合計 8 ポンド 19 シリング 6 ペンス

雌牛 1 頭、雄牛 3 頭、27 シリング - 子牛数頭、8 シリング 2 ペンス - ミルク、65 シリング 9 ペンス - 飼育のため預けられる雌牛 1 頭の飼育、2 シリング - 合計 102 シリング 11 ペンス

総収入の合計 17 ポンド 16 シリング $1\frac{1}{2}$ ペンス

支出 -

使用人 servants の賃金に 13 シリング - 彼らの手当て stipends に 10 シリング - 小間使い“garcionem”の賃金に 14 シリング 11 ペンス - 手当てに 2 シリング - 同じく特別な手当てとして 20 シリング - “pageto”何某に対して年払いで 2 シリング 3 ペンス

年金および寄付 -

庭師の O [後述] に 26 シリング 8 ペンス - 宮廷の使用人および関係者の寄進に関し、思し召しにより 2 シリング 11 ペンス - 施し物として 2 シリング $2\frac{1}{2}$ ペンス - オックスフォードの学者に 2 シリング - 修道院の副院長 Sub-Prior に 2 シリング - ハーブを刈り取った食糧保管係に 2 シリング - 施物分配係に庭に対する 10 分の 1 税 tithe [後述] として 12 シリング - 国王陛下に対し $1\frac{1}{2}$ ペンス、10 分の 1 の中 - 枢機卿に $\frac{1}{4}$ ペンス - 寄進および “flaunis” に 13 ペンス (= flaun = カスタード custards すなわ

ち祈願の時のパンケーキ) - 修道院長の収穫人に 6 ペンス - John de Leverington に 6 ペンス。John de Berney の大工に 6 ペンス。主教 Lord Bishop の “boscar” (= きこり) に 6 ペンス - 手袋に 7 シリング。 - 合計 60 シリング $\frac{3}{4}$ ペンス

草刈りその他 -

牧草地の草刈り、作物用および中庭・通路用、3 シリング 5 ペンス - 女子修道院および使用人のためのスープ用エンドウ豆 peas、3 シリング 3 ペンス - カラシ mustard の種、3 シリング 3 ペンス - 豆 beans、2 シリング 2 ペンス - 女子修道院の豆とバター、15 ペンス - サクランボ、 $8\frac{1}{2}$ ペンス - ミルク、16 ペンス - 飼料、12 シリング 11 ペンス - 合計 28 シリング $3\frac{1}{2}$ ペンス

除草および雇い入れ -

除草および手伝い“aids”、30 シリング 2 ペンス - Ralph Brenetour ほかの手当て、牧草地の土手の仕事および溝の清掃、12 日分、8 シリング - 1 日当たり 8 ペンス - 彼らの飲み物代ほかの費用 12 ペンス - 大工 1 人への手当て、材木を削りその他もろもろの物の修繕、2 シリング - タイルで屋根を葺きその他の仕事をしたタイル職人に 3 ペンス - 合計 41 シリング 5 ペンス - 小さいカワカマス“Pikerell”およびロウチ roach [コイ科の魚] ストック用、2 シリング 5 ペンス - ラード、獣脂、ロウソク、8 ペンス - 鉄製の鋤、[木の枝などを払う] なた鎌“bills”の修理、3 ペンス - 斧の修理および新品の手斧“Hachet” 1 本、7 ペンス - “skalurons” (? *escallions* = *scalions* = *small onions* 小さい玉ネギ)、1 シリング - 家畜の肥やし、3 シリング 3 ペンス - 鍵、 $4\frac{1}{2}$ ペンス - 診療所用 “Juncis” (= イグサ)、10 ペンス - “tribul” (= *sieves* or *rakes* レーキ) 2 本、鋤 2 つ、家畜の肥やし用くま手 2 本、鉄製新品、12 ペンス - 大鎌 1 本、1 ペンス - 土堀り道具“moles”、1 ペンス - 木製物差し 1 本、 $3\frac{1}{2}$ ペンス - 土手用の「粘土」“clayes” 2、10 ペンス - (長柄の) 大鎌の歯“dentation”、1 ペンス - 綱 (あるいは紐) 1 ペンス - 土製壺、1 ペンス - 4350 枚のタイルと運搬費、10 シリング 2 ペンス - 主教から任された牧草地、すなわち “hundhill”、2 シリング 2 ペンス - “limours cenonette” (? *whitewashers* 漆喰屋) 3 人、11 ペンス - “raton” (*rat-catcher* ネズミ捕り屋) に渡した 1 ペンス - 羊皮紙、1 ペンス - 合計、24 シリング 5 ペンス - 庭師用の修理した長靴、2 シリング 6 ペンス - 修道院長に送ったワイン代として、同胞に対し放血およびセントレオナルの日などの時に要した各種費用として 11 シリング $10\frac{1}{2}$ ペンス - 各種香辛料およびアーモンド、2 シリング $7\frac{1}{2}$ ペンス - その他費用、8 シリング - “Wardecorgard” に 2 シリング 6 ペンス - 合計、20 シリング 2 ペンス - 全費用の合計、10 ポンド 18 シリング $1\frac{3}{4}$ ペンス、この結果、収入が支出を上回った分は 6 ポンド 17 シリング $11\frac{1}{2}$ ペンス

西暦 1402 年 庭師事務所の同志トーマス・ルートンの会計簿 アレクサンダー修道院長の第 22 年
ミカエルマスからヒラリーまでの間

収入 -

前年からの繰越分、43 シリング 10 ペンス - 梨とナッツ (ヘーゼルナッツ “avelanis”) 4 シリング - リンゴ、16 ペンス - 葉物野菜、15 ペンス - 乾燥した木、18 シリング 3 ペンス - “pro faggots and Astel” (= 削りくず) 11 シリング 3 ペンス - ヤナギ willows、9 ペンス - ハーブ類、2 シリング 3 ペンス - 雄鶏と雌鶏、18 ペンス - タマネギ、3 シリング - ヤナギ類、3 シリング 4 ペンス - ネギ、6 ペ

ンス - “ tassel ” (=オニナベナ *teasel*)、5 シリング 10 ペンス - 地下貯蔵庫支配人に売却された木、
35 シリング 4 ペンス - “ lawyr of crabthorn ” その他、地下貯蔵庫支配人に売却されたもの、35 シ
リング 4 ペンス - “ pro lawyr of wythis ”、10 ペンス - 合計、4 ポンド 18 シリング 7 ペンス - 収入の
総計、7 ポンド 2 シリング 5 ペンス

支出 -

まずイグサとその運搬に、5 シリング - ニンニクとタマネギ、2 シリング - カラシの種、8 シリング 6½
ペンス - 豆、3 ペンス - 豆の植付け、12 ペンス - 羊皮紙、3 ペンス。使用人の 1 人に対する手当、10
シリング 6 ペンス - その他の使用人に 10 シリング - 彼らの上着 (チュニックス) “ tunics ”、8 シリ
ング - 庭の作業労働者への支払い、2 シリング 4 ペンス - オニナベナ “ tassel ” に関する他の労働者へ
の支払い、3 シリング 5 ペンス - オックスフォードの学者に、18 ペンス - 修道院長の御前でのちょっ
としたこととかその他のレクリエーション、2 シリング 6 ペンス - 女子修道院のミルク、2 シリング
2 ペンス - 食糧保管係にナイフ代、2 シリング - クリスマスの寄進、3 シリング - 庭師の長靴、15 ペ
ンス - 鋤、シャベル、その他の道具、13½ペンス - 贈り物、6 ペンス

総支出の合計、3 ポンド 8 シリング 1 ペンス

以上の結果、収入が支出を上回ること、3 ポンド 14 シリング 4 ペンス

西暦 1403 年 同志 Thomas de Corpsty の会計簿からの抜粋、ミケルマス、ヘンリー 4 世の第 5 年、ア
レクサンダー修道院の第 23 年目の同じ祝祭日まで

収入 -

“ Pro albell ” (= *abele, white poplar* ギンドロ [ドロノキの仲間で葉の裏が銀白色])、8 シリング 8 ペ
ンス - 材木、6 シリング 8 ペンス - “ pro crabdractis and ok ” (? *crab draughts, cartloads of
crab-trees and oak* 荷馬車一杯の野生リンゴの木とオーク)、3 シリング 9 ペンス - “ オニナベナ
pro tasles ”、6 シリング 8 ペンス - “ pro star ” (= *sedge* スゲ) および葦、16 シリング - “ pro
lillys ” (= *lilies* コリ)、½ペンス - 小さい庭に、8 ペンス - 譲渡された牧草地、37 シリング 8 ペ
ンス - 収入合計、10 ポンド 3 シリング 9 ペンス

支出 -

借金、59 シリング 4 ペンス - タマネギの種購入、12 ペンス - 釘と鍵、6 ペンス - 国王陛下の 10 分の 1、
1½ペンス - 手袋、7 ペンス - “ Pro tribul ” (= *rake* レーキ) 鋤ほか、3 シリング 9½ペンス - 庭師の
OO、26 シリング 8 ペンス - 使用人の手当て : その 1 人に、16 シリング、その他の人に 15 シリン
グ 2 ペンス - 彼らの上着、8 シリング 10 ペンス - 会計期日に 12 ペンス

支出合計、8 ポンド 8 シリング 6 ペンス - 借金を含めて 11 ポンド 7 シリング 10 ペンス

支出が収入を上回るところ、24 シリング 1 ペンス

西暦 1427 年 (全体) 同志 William Metygham の会計簿 セントマイケルからセントグレゴリーま
で、ヘンリー 4 世の第 6 年、ウィリアム修道院の初年

収入 -

ハーブ、ネギ “lekeys” and “Porrettes”、4 シリング - 木の束 faggots (“fasciculis”)、チダケサシ Astill およびヤナギ類 “ozyerys”(= osiers)、8 シリング 2 ペンス - 食糧管理係より牧草地、20 シリング - 門の間の庭、12 ペンス - 収入合計、33 シリング 2 ペンス

支出 -

前年からの借金、68 シリング - カラシの種、7 シリング 4 ペンス - 施物分配係に、12 シリング - キリスト臨降節および四旬節直前の日曜日のミルク、44 シリング 3 ペンス - ニンニクと豆の植付けと除草、2 シリング - 必要な時々の作業員の雇い入れ、15 ペンス - 庭師のための薬、2 シリング - 修道院長の御前およびセントレオナル祝祭日その他、3 シリング 2 ペンス - 使用人に対するクリスマスの贈り物、18 ペンス - 家、道具、棚 “shelvis” の修理および板の購入、5 シリング 4 ペンス - 庭師の長靴、12 ペンス - 使用人トーマスへの手当て、12 シリング - 使用人ジョンへ 9 シリング - 彼らの上着、10 シリング

支出合計、70 シリング 10 ペンス

支出総計、借金を含めて、6 ポンド 18 シリング 10 ペンス

以上、支出が収入を上回るところ、5 ポンド 5 シリング 8 ペンス

西暦 1484 年 同志 John Methan の会計簿、リチャード 3 世、ミケルマス第 1 日から、およびリチャード 3 世、ミケルマス第 2 日、John Bonwell 修道院長。

前年会計簿からの繰越

収入、3 シリング 5 $\frac{1}{4}$ ペンス。まず修道院長から、一区画の庭に関し、16 ペンス。この区画は大きな “fosse”(ditch 溝)により区切られた同じ庭の “果樹園 le ortzerd” に接続されたもの。 - 豆の売上、“eldyng”(= fuel 燃料)として使う同じ豆の茎 straw、6 シリング 10 ペンス - タマネギの売上、16 ペンス - 収入合計、繰越とあわせて 4 ポンド 7 シリング

支出 -

10 分の 1 税、これだけ、というのは借家のいくつかは、“Holmstrete”にある庭の敷地の上に建てられているからである。学者たち、同志 John Helgey および同志 William Gedney - Robert Cook に対し女子修道院のためのエンドウ豆と香辛料で作ったスープ、6 ペンス - “frixures”(= fritters 衣揚げ) - 修道院の中庭の芝生から苔 “mosse” を取り除く作業をした労働者の仕事に対し、6 ペンス - 庭をぐるっと廻る大きな溝の清掃、あわせて庭師の財務係 “scaccarium”(= exchequer)の脇にある小さな溝の清掃、18 ペンス - (何人かの労働者への支払いについてはその名前も記載) - “gryffing 内部報告”、4 ペンス - 耕作ほか、10 $\frac{1}{2}$ ペンス - Matermarket のセントジョン教区の Thomas Mylys および Henry Cobyller への支払い、これは庭を 3 回草刈りしたこと、および修道院の中庭を 2 回 “bina”(= twice) 草刈りしたことに対し、3 シリング - サクランボ園 orto cersor (= cherry garden) の “wyndowstal” 1 回分 - [麦などの脱穀に用いた] からざお “flagello”(= flail)、1 ペンス - カラシの種の収穫と脱穀をする労働者へ、7 ペンス

支出合計、4 ポンド 7 シリング 7 $\frac{1}{2}$ ペンス 収入が支出を上回るところ、2 シリング 10 $\frac{1}{2}$ ペンス

項目の中には毎年変わることなく出てくるものもあり、たとえば使用人への支払いや仕事着、長靴、手袋など。手袋は珍しくない項目でビスターBicester*、ペリーBury、ホーリーアイランド Holy Island などの場所の会計簿の中に見られる。多分それは除草用の厚手の手袋だったのであろう。

*ブロムフィールド『ビスターの歴史』Blomefield, *History of Bicester*

庭師の O もまた常連の項目で、それは毎年の祝祭日の支出であり、O というのはその場で庭師によって歌われる賛美歌で、“O Radix Jesse (おお、エッサイの根よ)”で始まる歌である〔訳注〕。アピンドンの会計簿には「O Radix に 6 シリング 10 ペンス」と記入されており、別の機会には(西暦 1388 年)、もう少し長めに “In expensis factis pro mitten-exennia ad O Radix XVIId (O Radix に対する贈り物の費用として 16 ペンス)”と書かれている。この “O Radix Jesse”は7つあるローマのあるいはグレゴリオ聖歌の偉大な O の中の 3 番目にあたる†。1 番目の O Sapientia は 12 月 16 日に歌われ、この日は今でも一般祈禱書カレンダー-Kalendar of the Book of Common Prayer に印が付けられている。有名なキリスト降臨節の賛美歌「おお来たれ、おお来たれ、エマニュエル」“O come, O come, Emmanuel”はジョン・メイソン・ニール John Mason Neale (1818 ~ 1866 年) による翻訳で、13 世紀頃に書かれた偉大な O の 5 番目のラテン語の詩を訳したものであり、この賛美歌の 2 行目は庭師の O を言い換えたものである。

〔訳注〕旧約聖書でエッサイ Jesse はダビデ王の父で、その根から子孫が広がりキリストが生まれる。

† 『考古学』*Archæologia*, 第 49 巻 エヴァラード・グリーン Everard Green, F.S.A.による論文

もう一つ注意すべきは、これらの会計簿等では 10 分の 1 税 tithe [収穫物の 10 分の 1 を教会に納めた税] が控除されていたことである。「果樹、すべての種、庭のハーブについて」10 分の 1 税が初めて制定されたのは西暦 1305 年のことであり、この支払を命じる布告はサリーのマートンにおける教会会議 the Council at Merton で発出されたものであった‡。‡ウィルキンズ『教会会議』第 2 巻 278 ページ「マートン」1306 年「果樹、すべての種、庭園のハーブに対して」Wilkins' *Concilia*, “Mertonense,” 1306, “et de fructibus abrorum et seminibus omnibus et herbis hortorum.”

項目の中で違いの出てくる主なものは普通、購入された道具や修理中の道具についてであり、「鋸」、「ハーブ用のナイフ」、「手斧の修理」、「庭の塀の補修」、「門の錠前と鍵」その他、時には庭での収穫が不足した時に買わなくてはならない果物、リンゴ、サクランボ、豆、タマネギ、その他同様のものである。しかし庭師の管理下にあったこの「大庭園」great garden が唯一の庭という訳では決してなかった。ほかにも管理部門を所有している多くの者たちが庭を持っていた。

ビスター修道分院 Bicester Priory の遺構および記録から編集された図面によると、様々

な庭の相対的位置関係、すなわち大きな庭、キッチンガーデン、果樹園とあわせて修道分院長 Prior、聖職者 Canon、診療所、聖具保管係それぞれの庭が示されている。そしてこのように明確に区分された庭が各種あるということは当時のものとして格別数が多すぎるということではなかった*。一般的に修道分院長は自分自身の囲み地を持っていた。メルサ Melsa では「修道分院長のものと呼ばれる庭」と「大修道院長の広間の庭」の 2 つがあった†。

* 『ピスター主席司祭の歴史』 J.C.プロムフィールド *History of the Deanery of Bicester*

† パートン大修道院長 『メルサ大修道院年代記』 第 3 巻, 242 ページ *Abbot Burton's Chronicle of Melsa*

シュロブシャー州のハーモン Haghmon 大修道院には、修道分院長に対して「気晴らしのために寮の中に一定の広間があてがわれ、・・・そこには古くは‘Longenores gardine’と呼ばれた庭があり、それは前述の広間に付属し、あわせて鳩小屋も同じく作られていた」(†ダグデイル『イングランドの修道院』(新編), 第 6 巻 112 ページ)。

ノリッジでは、庭師に対し、修道分院長から、「庭の区画」すなわち彼の特別な利用に供するために確保されている小さな土地への支払いがなされた。この「小さな庭」、すなわち「門の内側の庭」はノリッジでは食糧保管係に貸し出された。聖具保管係、管財係、音楽監督および「業務管理人」Custos operum はアビンドンではすべて独立の庭を持っており、庭師に対して庭の賃料を支払っていた。ウィンチェスターでは庭師 custodi gardini “Roberto Basyng” への支払いは、受取人の会計簿に残されており(西暦 1334 年)、そこには施物分配係の庭の草刈り代金も残されている。またこれらのほか、「業務管理人」は “Le Joye” という名の庭の費用を支払っていた。診療所の庭は普通に考えて重要なものであったが、それはそこで修道院の病人のための治療用のハーブを育てていたからであり、そのため便利のようにこの場所は通常診療所あるいは病院の近くに設けられた。

すべての国において、異教徒であろうとキリスト教徒であろうと、またすべての時代において、花は葬式、結婚披露宴などの儀式において重要な役割を果たしてきた。中世のイングランドもその例外ではなかった。教会での礼拝、聖職者の任命、花輪によるろうそくの飾り付け wreathing candles、祭壇の礼拝の時に花を使用することは極めて普通のことであった。

これらの花を修道院の壁の内側の庭園で栽培することは聖具保管係の仕事であった。アビンドンでは、庭師の庭園を借りるのに 4 ブッシェルの小麦 corn [1 ブッシェル=36 リットル]を支払ったとの記録が残っている*。

*アビンドン会計簿 R.E.G. カーク：

「1388-9 年、そして 4 ブッシェルの小麦を聖具保管係の庭園に対して(支払った) デナリウス銀貨でなく、なぜなら(受け取ったその代金がより以上に増えるから?)」1388-9, et di iij bussellis frumenti de Sacrista pro orto suo, nichil hic in denarijs quia recipiuntur in sua specie ut patet extra.

ノリッジでは、聖具保管係は複数の庭園を持っていたようで、その事務所の会計文書をほんのざっと見ただけで、「セントメアリーの庭園」と「緑の庭園」の 2 つの名前が書かれている[†]。9 世紀には早くも、ウィンチェスター Winchester に「聖具保管係の庭園」“*gardinum Sacristæ*”があり[‡]、それが今日では、大聖堂の北翼廊の東側にある小さな土地が「パラダイス」と名付けられ、聖具保管係の庭園があった場所と記されている。今なお現存している 15 世紀に作られた門戸は囲み地への入口があった場所であった。

[†] 聖具保管係の会計簿 写本 ノリッジ

1431 年 「セントメアリーの庭園の草取り 2 シリング」

1428 年 「『緑の庭園』の草取り」

1489 年 「風で吹き倒された梨の木の幹の代金 11 ペンス」

庭師の会計簿 1472 年 「聖具保管係の庭園の農場に対し 2 シリング」

[‡] ウォートン『イングランドの聖職者』第 1 部 209 ページ Wharton, *Anglia Sacra*

このような庭園についてその名前が出てくるのは、ラムゼー大修道院長が 1114 年から 1130 年の間に、ロンドン市内のある土地について何らかの合意が必要となった時であった。その土地というのは、三位一体修道分院 the Priory of the Holy Trinity の土地に隣接しており、修道分院長は「大修道院長の礼拝堂および礼拝堂の前の庭園に対する要求を取り下げること」を承諾した（§ 『ラムゼー修道院記録文書』第 1 巻 133 ページ）。このような「聖具保管係の庭園」は修道院の敷地の中だけにあったのではなく、多くの教会や礼拝堂に付設されていた。アビンドンの庭師は「聖ニコラス教会の隣の」庭園を院長 the Rector に何年かの期間貸していた（∥ 1413 年会計簿, カークによる）。サマセットシャー州ウッキー荘園 the Manor of Wookey の中の礼拝堂庭園はバースとウェルズの司教 the Bishops of Bath and Wells の所有物であり、1461 年から 62 年にかけての 1 年間におけるその土地の管理人 Reeve の会計帳簿の中に興味深い記録が残されている（¶ 『ウッキーの教区および荘園の歴史』ホウムズ著 *History of the Parish and Manor of Wookey*, by T.S. Holmes.）。3 人の男たちが日当 2 ペンスで 4 日半雇用され「礼拝堂庭園を耕しきれいにする」と書かれていた。

ヘンリー 6 世 [在位 1422 ~ 61 年] はイートン校の教会に素晴らしい庭園を残した。彼の遺言にはこう書かれている。「教会の壁と回廊の壁との間は 38 フィートとすること、そこには一定の木と花を植える場所とすること、それはその教会の礼拝のために必要かつ便利であるから」、そしてそこは「便利なタワーを備えた十分に高い壁」で囲まれていなければならない*。教会に隣接したこのような庭園の実例はほかにも多数ありいくらでも列挙できるであろう（*ニコルス編『イングランドの国王と女王の意思』Nichol's *Wills of the Kings and Queens of England*, Ed.1780 年, 298 ページ）。

すべての重要な行事では、行進の時あるいは礼拝の時に、聖職者たちは花の冠を被っていた。これは特にロンドンのセントポール寺院での習わしであり[†]、1405 年 6 月 30 日□

ジャー・ドウ・ウォールデン Roger de Walden 司教 [~1406 年 大蔵卿] がそこに任命された時、彼と大聖堂の聖職者たちは厳かな行列を成して歩み、赤いバラの花冠をまとっていた[‡]。

[†] ポリドール・ヴァージル『発明と起源の歴史』第2巻 Polydore Vergil, *De rerum Inventoribus*

[‡] 『ロンドンの聖職者の歴史』ウォートン著 1695 年 (150 ページ) *Historia de Episcopis et Decanis Londiniensibus*, by H. Wharton

これらの「聖なる冠」“*coronæ sacerdotales*”、すなわち祝祭日に聖職者が身に着けた花輪の使用は何世紀にもわたって続けられ (§ 「儀式における花の使用」『19 世紀』1880 年 “*Ceremonial use of Flowers*,” *Nineteenth Century*), 宗教改革の時代まで広く使われたことは様々な教会事務員の会計簿から明らかである。ただし、このような記入例の数がそれほど頻繁という訳ではないのは、教会に付設されている庭園というものは、当然のことながら、基本的には普段使うくらいの花は十分に供給できたので、買わなくていけないのは、大きな行事や特別の祝祭日で、いつもより大量の花が必要な時に限られていたからである。

たとえば、セントメアリー・ヒル St. Mary Hill では、その会計簿にはいくつかの記入項目を見つけることができ、教会の近くには庭があった (|| ニコルス, 『イングランドにおける風習と支出の実例... 教区委員会計簿等から』1797 年 *Illustrations of the Manners and Expenses in England... deduced from Accounts of Churchwardens, Etc.*)。

西暦 1483-1497 年 セントメアリー・ヒル 教会管理者の会計簿 ミッドサマ Midsomer のカバノキ、8 ペンス - パームサンデー [イースター直前の日曜日] のツゲおよびヤシ、1 シリング - Estirevyne の Polis、10 ペンス - 聖体祝日の花冠、10 ペンス - セントバーナビ St. Barnebe の日の 1 ダース半のバラの花冠、8½ペンス - セントバーナビの日のバラの花冠とクルマバソウ wodrove の花冠、11 ペンス - セントバーナビの日の司祭と事務員のための *doss. di bosce* の花冠 2 つ

1510 年 パームサンデーのヤシの花とケーキ、10 ペンス

加えてセントマーチン・アウトウィッチ、ロンドン、1524 年

項目 - 聖体祝日のバラの花冠、6 ペンス - 項目 - ミッドサマのカバノキ、2 シリング - 項目 - ij セントマーチンの日のバラの花冠、パン、ワインおよびエール、15½ - 項目 - クリスマスのセイヨウヒイラギ holy とツタ、2½シリング

1525 年 パームサンデーのヤシ、2½シリング。イースターのスズメノチャヒキ brome、1 シリング支払い。聖体祝日のバラの花冠、6 ペンス支払い

このように教会を飾り立てることが、宗教改革の後では違法であるとされると、庭園の土地がいきなり別の用途に振り向けられることはなかった場合でも、自ずとこれらの庭園は使われなくなっていった。

1618 年、ジェームズ 1 世 [在位 1603 ~ 25 年] はお触れを出し、一定の「合法的な気晴ら

しについては、神聖な礼拝の後に*」これを認めるといふもので、「女たちは昔からの慣習に従い教会を飾るためにイグサ rushes を教会に持ち込むことを認める」といふものであった。

*フラー『教会の歴史』1655年、第10巻74ページ、ロンドン Fuller, *Church History*

これらのイグサは単に床用のもので、祭壇や壁を飾るものではなかったかも知れない。それは、たとえば1580年、バッキンガムシャー州のウイング Wing の教会管理人が「教会のコミッショナーに対して教会建物に敷くためのイグサ 1束に」(†『考古学』*Archæologia* 第36巻238ページ)1シリングという記録があるからである。ダラムのセントニコラス教区の聖具室の帳簿には、1665年から1703年の間、装飾用のカバノキ birch とあわせて床に敷くためのイグサを購入したとの記入が何箇所かある。「聖霊降臨祭 Whitsontide にあたって教会にカバノキ、1シリング 8ペンス。ランスロット・ダンに対し教会の信者席の飾り付け用、およびすべての信者席に敷くイグサ用に1670年7月21日、8シリング」(‡ダラム教区帳簿 Durham Parish Books. サーティーズ協会)

コールズ Coles [William~, 1626~62年 植物学者]が1656年になって書いたところによると「教会に花輪を捧げる習慣が私たちから取り去られてからそれほど経ってはいなかった。場所によっては、クリスマスの時、教会にセイヨウヒイラギ、ツタ、ローズマリー、月桂樹、イチイなどの飾り付けをすることはまだ行われていた」(§『薬草の使用法』*The Art of Simpling*, W. コールズ著 1656年)ということである。しかしながら、これは随分先のことであり、今私たちが見ている時代では、静かな回廊の中で暮らしていた修道士たちは、教会と礼拝堂を飾るために、年々歳々、自分たちの技術と知識の限りを尽くして一番見事な花を作っていたのである。

さて、庭師たちの部署の話に戻るとしよう。彼の仕事は庭園だけではなく、果樹園とブドウ畑にもその管轄は及んでいた。

果樹園すなわち“pomerium”では食用、料理用のリンゴや梨だけではなく、リンゴ酒 cider 製造のためにリンゴを生産した。天候が異常に悪くリンゴが収穫できない時以外は、大量のリンゴ酒が毎年製造された。これは1352年の事例であるが、その年、ウィンチェスターの施物分配係は自分の会計簿に次のような記述をしている。「今年はリンゴが収穫できなかったのでリンゴ酒はまったくない」“Et de ciserat nihil quia non fuerunt poma hoc anno.” 1412年もリンゴが収穫できない悪い年で、アビンドンではリンゴ酒がまったく作られず、修道院の中には自家用にリンゴと梨を、たまに買うというどころではではなく頻繁に買っていたところを見ると、自分の消費する分すら十分にいつも栽培している訳ではなかった。もっとも年によっては十分、貯蔵できるほど収穫できることもあった*。

*庭師の会計簿、アビンドン、1388年「13シリング 4ペンス、おおよそのところで、ヒヨコ豆の売却、そして32シリング 6ペンスは果物の売却に対して、すなわちリンゴ、ウォーデン梨とナッツ」

“Et de xiiis. iiiid. De cicera vendita per estimacionē et de xxxiis. vi d. ob. de fructibus venditis, viz.:

pomis wardon et nucibus.”

ウォーデン梨 Wardon pear は何世紀もの間とても人気があり、この梨は元々はベッドフォードシャー州にある [ウォーデンという] 同じ名のシトー修道院 the Cistercian monastery を発祥の地としており、自分の紋章に 3 つのウォーデン梨を掲げている † [訳注]

それは一種の料理用の梨であり、どんな初期の料理本にも「ウォーデンパイ」、すなわちパステイー [肉、野菜、ジャムなどを入れて焼いたパイ] のレシピが載っている。ウォーデン梨は、通常、一つの別個の果物として認識され、たとえば「リンゴ、梨、ウォーデン梨およびマルメロ」というようになっているが、これはこの梨が一番よく知られている品種だからである。

†ダグデイル『イングランドの修道院』第 5 巻 371 ページには、それらはアボットの梨 Abbot's pears とも呼ばれていたと書かれているが、根拠は示されていない。

[訳注：『ウォーデン梨の起源』*The Original Warden Pear* の著者であるマーガレット・ロバーツ Margaret Roberts によると、この記述にはまったくの根拠がなく、15 世紀半ばにこの紋章が採用されたはるか以前より、イングランドでこの梨は人気があった。また、ウォーデンのスプリングは初め Wardon であったが、次第に Warden へと変わった。<https://www.wardenvineyard.org.uk/warden-pear/> 参照。

果樹園の中にはかなりの規模のものもあったに違いない。ジョン王の時代 [在位 1199 ~ 1216 年 失地王、マグナカルタに署名] ラントウニイ Llanthony 修道院に与えられた土地には 12 エーカーの果樹園が含まれていた。果樹園が早くから存在していたことを証明するためよく引用される事例としては、1175 年のアレクサンダー 3 世 [1105? ~ 81 年] の教皇勅書であり、これは「Swiring の町とそのすべての果樹園」とともに、グロスターシャー州ウィンチェンリー Winchenley の修道士の財産を没収したものである。

サクランボはローマ人により持ち込まれた時以来、この国において人気の高い果物である。サクランボの木 ciris beam はサクソン初期の時代においても栽培が続けられた。 12 世紀にはシトー大修道院長ネッカム Necham [Alexander~, 1157 ~ 1217 年 神学者・学者] の詩、『称賛すべき神の知恵について』“De laudibus divinæ Sapientiae”の中で誉め称えられた果樹の一つであり、どの修道院の庭園でも忘れられることのなかった果物であった。

ノリッジでは “Pomerium”、すなわちリンゴ園や果樹園のほかに、「サクランボ園」あるいは別の場所では “orto cērsōr” すなわちサクランボの庭と呼ばれたが、このような状況にもかかわらず、折々に「女子修道院」のためにサクランボを購入せざるを得なかったことがわかっている。なぜならこの果物に対する需要が極めて大きかったからである。多分あまりにも頻繁にサクランボが使われたことから、ネッカムがその読者に対し「サクランボ、クワの実、ブドウは食後ではなく空腹時に食べなければならない」(*ネッカム『諸物の性質について』*De Naturis Rerum*) と警告することが妥当であると思わせたのであった。

さて次に第三番目の部署、「庭園の管理人」について検討されなければならない。既に指摘されたとおり、英国ではブドウはローマ人によって栽培され、ローマ人による支配が終わった直後の断絶の時期を例外として、ブドウの歴史は連綿としてつながってきた。ハンプシャー州のヴァイン Vine [ブドウ] と呼ばれる土地の名前を見ればその伝統がわかるというもので、この名前は皇帝プロブスの時代にここにブドウが植えられたことから付けられたものである。10世紀当時、勅許状を持つサクソンのいくつかの土地においては、境界としてまたはランドマークとしてブドウの木、すなわち“Winestreow”が使われており、これらはローマ人のブドウ畑の名残ではないかと考えられるのである[†]。

†ケンブル『法律行政公文書』第5巻 *Kemble's Codex Diplomaticus*

1146年 MCXLVI. Eadmund, 943. Lechamstide.

1177年 MCLXXVII. Ealdred, 949. Boxoram.

1198年 MCXCVIII. EAdwig, 956. Welligforda, &c.

ベアダ Bede [673?~735年 アングロサクソン期の聖職者・歴史家・神学者] が8世紀初頭に書いたところによると、英国は「穀物と樹木に恵まれており、・・・また土地によってはブドウも育つ」とされた[‡]。

‡ベアダ編『イングランドにおける教会の歴史』1848年108ページ *Hist. Eccle. Gentis Anglorum*.

アルフレッド大王 [849~899年 デーン人を撃退] の法律 (§ *LL. Saxon. Wilkins*, 31 ページ *LL. Aelf* : 26)、それは主として既存の法律を集大成したものだが、そこには何人も「ブドウ畑または他人の農地に損害を与えた者は弁償しなければならない」と書かれていた。10世紀にはエドウィー王 King Edwy [在位 942?~959年] はサマセットの Pathenesburgh のブドウ畑がグラストンベリー大修道院 Glastonbury [アーサー王の埋葬地とされる] に与えられたものであることを確認した。ブドウは10月に収穫されたため、その月は「冬の貯蔵月」 Winter filling moneth あるいは「ワインの月」 Wyn moneth と呼ばれ、これもブドウがどれだけ栽培されていたかを示すもう一つの証拠と言えよう。ブドウの剪定は2月に行われた。大英博物館所蔵のアングロサクソン写本の中の、ブドウを剪定する人の絵を見ると、カレンダーの2月であることがわかる。



[図 1 - 3] ブドウを剪定する人 アングロサクソン写本より 11 世紀
大英博物館 コットン ティベリウス B.5.

[訳注 : コットンとはサー・ロバート・ブルース・コットン Sir Robert Bruce Cotton による写本などのコレクションで、今は大英図書館などが所蔵。ティベリウス Tiberius とは分類されている書棚の名称]

ネッカムはその著書『諸物の性質について』*De Naturis Rerum* の 1 章をブドウに充てているが、それは主に道徳的な立場からであり、実用的な意味でこのテーマを取り上げた訳ではなかった。ブドウの収穫にあたって最後の列のところまで来たなら、ブドウ畑の労働者たちは喜びの歌に身を委ねるが、残念なことに彼らの歌がどんなものであったかが伝えられていないので私たちの好奇心を満足させてくれない。

イングランドの土地台帳、ドゥームズデイ・ブック Domesday Book [ウィリアム 1 世が 1086 年に作らせた] の中には、「ブドウ剪定人」*vinitor* のことはたった 1 回しか出てこないが、ブドウ畑の大きさがどのようなものであったかという感じは、多数のいろいろな地域で行われた約 38 の調査から知ることができよう*。その大きさは通常、「アルペンド」*arpendi* という単位で測られ、アルペンドとは約 1 エーカー [約 4047m² アルバンはフランスの昔の土地面積単位、今でも使われている地域がある] かもう少し小さい面積である。最大のものにはパークシャーの Bitesham にあり、そこはアンリ・ドゥ・フェリエル Henry de Ferrieres [1036 ~ 1100 年頃 ノルマンの貴族] の土地で 12 アルペンドあった。ブドウ畑の中には古くからのものもあったが、新しく植えられたものもあり、ウェストミンスターの畑は 4 アルペンドで「新しく植えられたブドウ」*vineæ noviter plantatæ*、ウェアの別のブドウ畑は「一番最近植えられた」*nuperrime plantatæ* と記されている。ブドウ畑の中にはブドウの実がなるものもあれば、ならないものもあり、これらは「ブドウがなるもの」*vineæ portantes*、「ブドウがならないもの」*vineæ non portantes* として区別されている。エセックスの 6 アルペンドのブドウ畑から収穫できるワインの量は、良い年なら 12 「モデ

イ」modii、すなわち約 40 ガロン [1 ガロン=約 4.5 リットル] であった。

*ケント、ハンプシャー、ウィルトシャー、ドーセット、グロスター、パークシャー、ハートフォード、エセックス、サフォークなどにおいて。

『ドゥームズデイ・ブック概説』サー・ヘンリー・エリス著 1816 年 37 ページ *A General Introduction to Domesday Book*, by Sir Henry Ellis

ノルマン征服以前に、イングランドにはこれほど多くのブドウ畑があったのだと誇らしげに語ったとしても、ブドウ栽培が盛んな国から外国人が流入してくれば、当然のこととしてワイン文化に新鮮な情熱が注ぎ込まれることになり、大陸の大修道院長や修道分院長とともに、修道院もいち早く自分の土地の古いブドウ畑を改良し、また新しい畑を作った。「ブドウ畑」という名前は、それを植えた修道士たちが死んでしまった後にも、長い間残された。たとえばグロスター近くの「ヴァインヤード」は、キャムデン Camden [William ~, 1551~1623 年 古物研究家・歴史家] が書いたブリタニア *Britania* [1586 年] ではブリッジマン家の居所とされ、町の西側の「丘の上」は、グロスター大修道院長の所有のブドウ畑であった (*ガフ編『キャムデン』第 1 巻 392 ページ 1806 年 Gough's *Camden*)。グロスターシャー州はブドウで有名で、12 世紀のマームズベリーのウィリアム William of Malmesbury [1090 頃~1143 年頃 年代記編者] は「イングランドのどの場所より量的にもたくさん収穫でき、また香りも心地よい」と書いた。と言うのもこのワインは「口当たりが鋭くて嫌な感じ、ということではないし、甘さにおいてもフランスのものに引けをとらないから」である†。

† 『(イングランドの) 司教の事績について』第 4 巻 *De Gestis Pontif. [Pontificum Anglorum]*

話を元に戻せば、「ヴァイン通り」という名称は、ロンドン、グランサム Grantham [リンカーンシャー州の都市、ニュートンの生誕地]、ピーターバラ Peterborough その他多くの町に見つけることができる。多分、この後者の場所 [ピーターバラ] の名前は 12 世紀に大修道院長マーチンによって植えられたブドウ畑の場所を示しているのであろう。

‡ ヘレフォードでは、南西に傾斜した斜面に「ヴァインフィールド」として知られる場所があり、そこではブドウのためにこしらえた段々畑が今もなおはっきりとわかる。

‡ 聖職者の会計簿 *Ministers' Accounts*, B. 1138, No.4. 司教の世俗的財産, ヘレフォード教区 - 公文書館 *Bishops' Temporalities, Hereford Diocese. - Record Office.*

1369 年、Louis de Chorlton の死により司教座 the See が空席になった時、そして次の任命がなされるまで土地が国王 (エドワード 3 世 [在位 1327 ~ 77 年]) の手中にあった時、ヘレフォード教区の会計簿は Ledesbury 荘園の中にブドウ畑が存在していたことを示している。同様の会計簿には、1536 年から 7 年にかけて (§ 王室会計文書 *Exchequer Q.R.*, ヘレフォード教区 No.133 公文書館) その場所には以前ブドウが植えられていたことが証明されると

もに、それらがいかにゆっくりと消えていったかがわかるのである。しかしながら、わが国の気候条件のもとで、ブドウ畑がなくなったことよりも人々を感心させる素晴らしいことは、ある時期、イングランド全土にわたり、これほど多くのブドウ畑が広がっていたことである。チェシャー Cheshire ほどの北の地域でも、本当にブドウ畑があったようには思えないが、12 世紀にはブドウは知られていない訳ではなかった。と言うのもダラムのレジナルド Reginald によると、チェシャーの Lixtune には、木造の小さな教会があり、そこにはブドウが這い上がっていたようである。

|| 『ダラムのレジナルド 聖カスバートの美德について』サーティーズ協会, 1835 年 307 ページ

Regin. Dunelm de B. Cuthberti virtutibus. [Reginaldi Monachi Dunelmensis Libellus de Admirandis Beati Cuthberti virtutibus]

11 世紀の「カヌート王 [1016~35 年 イングランド王] が船でやってきた時」の頃のイーリーが惨めな水はけの悪い湿地から立ち上がってくる様子を思い浮かべることは難しい。ところが回廊の周りの日当たりのよい斜面にはブドウ畑が大変な密度で植えられ、大変楽しげに歌う修道士たちによって世話をされていたので、ノルマン人はここに「ブドウの島」という名前を付けた。

また別の古い詩 rhyme はこれらのブドウを次のように称える。

“ Quatuor sunt Eliae: Lanterna, Capella Mariae,
Et Molendinum, nec non claus Vinea vinum. ”

その「英語化」は 1653 年にオースティン Austin [Ralph ~, 1612 頃~76 年 ガーデニング・農業の著作家] によりなされた。

(仮訳)

“ Foure things of Elie towne, much spoken are イーリーの町の4つのこと、多く語られてきたものは
The Leaden Lanthorn, Marie’s chappell rare 鉛のランタン、珍しいマリアのチャペル
The mighty Milhill in the Minster field, ミンスター平原の強大な Milhill,
And fruitful vineyards which sweet wine do yeeld. ” * そして甘いワインを生み出す豊かなブドウ畑
*ラルフ・オースティン『果樹に関する論考』1653年 Ralph Austin, *A Treatise on Fruit Trees*

イーリーはそこで収穫されるブドウのおかげで長い間有名であり続けた。時々、荘園が国王の手にあった時代、それは司教が死んで席が空いている間、土地の経営に関する書類により、司教の所有であった果樹園と庭園と同様にブドウ畑の様子がわかり、そこから利益が生みだされていた。主な記入事項としては、売却された「庭の葉物野菜」herbage of the garden、「リンゴ」、「梨」および木の実、それと麻、ヨシ reeds も含まれていた。“rosery”の栽培農園という項目もよく出てくるが、その用語にはガッカリさせられる。その意味するところは湿地の中の“roseria”、“rosar”、すなわちヨシあるいはイグサの苗床の場所のことであった。

†王室会計文書, 司教の世俗的財産, 91/95; および 聖職者の会計簿, 1132/9. (公文書館)

‡“Litolport 受胎告知の祭日に‘Roseria’の年間賃料として 40 シリング”

西暦 1302 年 Du Cange Glossarium “Roseria”=フランス語で葦のこと = Arundo, Juncus. 古いフランス語は rosière = “lieu rempli de roseaux”

以下は、ほとんどの荘園で記載されていたものの実例である。

1286 年 Downham. 9 シリング リンゴとナッツの現地売上

1286 年 Littleburi. 7 シリング 2 ペンス リンゴと梨の同時期の現地売上

1286 年 Derham. 15 シリング リンゴの現地売上

1298 年 Feltevelle. 55 シリング 9 ペンス 庭の葉物野菜と果物、および牧草の売上

「島を除く、ケンブリッジの管轄区域」内にあるサマシャム Somersham 荘園には、ブドウを生産するブドウ畑が存在したが、やはり本命はイーリーそれ自体であった。1298 年には 27 ガロンのヴァージュース verjuice [ブドウから作った酸味果汁、料理用] “viridi succo” が売却され、翌年には 21 ガロン売却された。

その記入状況は次のようになっている。

「そして 109 シリング 8 ペンス、これはブドウ畑やその他いろいろな場所で穫れた牧草と葉物野菜を夏の間に売却した代金。そして 25 シリング 3 ペンス、これは 2 箇所の庭とブドウ畑で穫れた果物の代金で、ブドウのほか、21 ガロンのヴァージュースを売却したもの。そして 10 ポンド、大酒樽 9½ 個分のワインの売却分、前年からの残金」

1302 年の別の記述にはブドウのほかの果物としてサクランボが出てきており、サクランボもブドウ畑で栽培されたが (*「ブドウ畑のサクランボの売上 20 ペンス」) また同じ年にはブドウの剪定人の制服の費用と配下の労働者への支払いが行われており、賃金は穀物で支払われた†。

†3月20日より7月18日まで - エドワード 1 世の第 30 年。「小麦と大麦 - 1 人の‘ブドウ剪定人’の同期間内の制服代として 2 クォーター 1 ブッシェル、8 週間分として 1 クォーター。同期間内の彼の使用人 ‘garcio’の制服代として 6½ ブッシェル 1 ベック、20 週間分として 1 クォーター」

[穀量の単位 : 1 クォーター = 8 ブッシェル、1/4 トン。1 ブッシェル = 4 ベック、36 リットル。1 ベック = 8 クォーター、1/4 ブッシェル、約 9 リットル]

イーリーの司教はホルボーンの自宅である「イーリーパレス」の庭園に付設されたブドウ畑も所有しており、その場所は今「ヴァイン通り」としてその名を留めている。これらの庭園の最も初期の記録はエドワード 3 世の治世に遡り、その記録はイーリーに保管されている。これらの記録は、そこに書かれているロンドンの通りや家の名前から見て大変興味深いものがあり、その中には庭園が付設されていたものもあったが‡、それに対しては司教に賃料が支払われていた。

‡1312 年「Faryndonesin にある庭園の・・・」 “In lez railles in gardino apud Faryndonesin.”

ただし、今私たちが庭園なりブドウ畑なりその詳細を知ることができるのは最も初期のものいくつかに限られている。と言うのも 1379 - 80 年から 1480 - 81 年にかけて年間 60 シリングでこれらの土地が貸し出されたからである。庭園だけの貸出料は 20 シリングであった。1419 年までの会計簿はイーリーで保管されており、その続きである 1423 年から 1483 年までの記録は公文書館にある（§ 聖職者の会計簿, 司教の世俗的財産, 1135/10.）。後者のうち、ジョン・モートン司教 Bishop John Morton [1420 頃 ~ 1500 年] の時、すなわちエドワード 4 世 [在位 1461 ~ 83 年] の第 20 年、21 年には庭園はとうとう再び司教の手に戻ったこと；帳簿には賃料の記載はない、「占有されていた土地は今年は本来の所有者のもとに」“ quod occupatur ad vsum domini proprium hoc anno ” と書いてある。

以下、イーリーの最も初期の会計文書 rolls の翻訳である。

Adam Vynour の会計簿。彼はイーリーの主教の庭師 (“ ortolani ”) でホルボーンの荘園で働き、その荘園の地代の集金人。エドワード 3 世の第 46 年目の聖ミカエル祭 [9 月 29 日] から 47 年目の 6 月 7 日まで (1372 - 3 年) の間の記録。(その後に、統制賃料と店の農場への支払い。77 シリング 6 ペンス)

庭の収益 - 16 シリング、タマネギとニンニクの売上。そして 9 シリング 2 ペンス、ハーブ、「ネギ」、パセリ、葉物野菜の売上。そして 48 シリング 6 ペンス、牧草地 “ le grasgerd ” の牧草の売上、そして 5 シリング 4 ペンス、さや付き豆の売上、合計 79 シリング、そして 6 ポンド 6 シリング 8 ペンスは **サ**
- ・トーマス・ウィルトン Sir Thomas Wylton より、収入合計 14 ポンド 3 シリング 2 ペンス。

支出 - いろいろな教会等へ返金された地代

ブドウ畑および中庭のコスト並びに各種労働者および女性への支払い、それはブドウ畑および中庭を耕し、また中庭をきれいにし、雑草を引き抜いたことに対し、この会計簿に区切って by the parcels 綴じてあるように、69 シリング 1½ ペンス、そしてイバラ thorns の購入、すなわち、大きな庭の周りに生垣を作るための荷馬車 4 台分のイバラに 6 シリング 8 ペンス、そして同じ庭の周りに 121 [6 × 20 score + 1] パーチ perches [5.03m] の生垣を作る 2 人の男への支払いとして 35 シリング 3¾ ペンス、1 パーチ当たり 3¾ ペンス、111 シリング 1 ペンス

修理コストほか -

土地管理人の賃金 - 会計担当者の賃金として 35 週と 6 日分、62 シリング 9 ペンス。少年 1 人の賃金としてブドウ畑および中庭の耕作、12 月末日から 4 月 17 日まで、イースターのお祭り、106 日分、17 シリング 8 ペンス、1 日当たり 2 ペンス。同じ少年への支払いとして同じ期間、5 シリング。会計担当者の半年分の支払いとして 13 シリング 4 ペンス。 - 合計 14 ポンド 18 シリング 9 ペンス。

少額支出　ホルボーンのセントアンドリュウ教会の主任司祭 Rector への支払い、大庭園の牧場の 10 分の 1 税として 4 シリング 10 シリング。すべての支出合計、15 ポンド 12 シリング 6¾ ペンス。

その後、同じ (会計担当者) に 21 シリング 6¾ ペンスの支出委任、そこからホルボーンの Prebend [僧祿の原資である土地] の受祿聖職者 Prebendary であるサー・ウォルター・ドウ・オールドベリー Sir Walter de Aldebury にイーリー修道分院のブドウ畑の地代として、過去 6 年と 4 分の 1 年分、すなわ

ち年間 3 シリング 5½ペンス、すなわち主教 Lord Bishop が上記修道分院のブドウ畑を栽培していた全期間に対する支払いとして。そして同じく 9 シリング 4 ペンスが会計担当者への支払いとして、それは主教 Lord の死亡した日から数えてミカエル祝祭日まで 16 週間分として、1 週間当たり 7 ペンス、上記ブドウ畑と前述の牧場の管理費用として。そして両者の黒字合計は 60 シリング 3¼ペンスであり、それを彼はサー・ロジャー・ボシャン Sir Roger Beauchamp から受け取った。そして彼は満足して職を離れた。

(裏に) ヴァージュース - ブドウ畑の収益として 30 ガロンのヴァージュースに対する同じ回答 - 合計 30 ガロン - そのうち 10 分の 1 税が 3 ガロン - そしてパセリの種 (“seminis petrosilli”) 1 ペック [乾量約 9 リットル、8 quarts、1/4 bushel] に対し、およびヒソップ (“ysop”) の種 1 クォート [乾量 1.13 リットル、1/8 peck] に対し。 - そしてセイボリー (“savori”) の種 1 クォートに対し、およびネギ (“lekes”) の種 1 クォートに対し。

農機具 - 鉄製の鋤 (“vange ferree”) 2 つ、レーキ (“tribul”) 1 本、鍬 (“howes”) 4 本、そしてランプ (“lucerna”) 1 つ、“shave” 1 つ、斧 (“bolex”) 1 本、ろうそく用の箱 1 箱、香辛料用の箱 1 箱、後者は壊れている。

イーリー司教のホルボーンのブドウ畑はその付近で唯一のものという訳ではなかった。すぐ近くにはリンカーン伯爵所領の畑があり、そこからは 50 ガロンのヴァージュースが 1 年間 (1295 - 6 年) で売却された (*ランカスター王族公領会計簿第 1 巻 No.1 Duchy of Lancaster account)。もう少し続けると、スミスフィールド Smithfield ではエセックス伯爵のジェフリー Geoffrey, Earl of Essex [~ de Mandeville II, ~ 1144 年] によってブドウ畑が植えられたが、その土地は「ロンドンのトリニティ教会の聖職者 Canons」のもので、1137 年に取り戻されたものであった†。

†ライマー著『協定』概要第 1 巻 3 ページ Syllabus of Rymer's *Fœdera* [1101 年以降のイングランド王室と諸外国とのすべての協定、条約、同盟等を集大成したもの]

今までに存在したと思われる修道院の施設の一部であるブドウ畑のすべてを列挙するなどということはうんざりするであろうし、中には単に名前だけだったり記録もほとんど残っていないものがある。たとえば、カンタベリー、ピューリ、ラムゼー、アピンドン、スポルディング Spalding、ベリー・セントエドモンズ Bury St. Edmunds などなど多数ある‡。庭師の部署においてブドウ畑がいかに大切な項目であったかについては、既に十分述べたところである。彼の仕事は、しかしながらそれだけではなかった。堀と池も彼の仕事であった。ノリッジでは庭師の任務として溝の清掃費用の面倒を見なければならなかった。この溝というのは、いろいろな庭園を区分したり、修道分院長の庭園を主庭園から切り離す等の役割を持っていたものであった§。アピンドンでは庭師は堀の清掃費用を支払っていたことがわかっており、これら 2 つのほかラムゼーでは、庭師は堀および池の魚を捕まえるためのネットとバスケットを買っていたことがわかっている||。

‡ アビンドンにおける 1 年間のヴィンテージの総費用は 4 シリング 4 ペンスであった。1388 - 9 年のブドウ畑からの利益は - 「ワインから 13 シリング 4 ペンス、ブドウから 20 シリング 0½ペンス、ヴァージューズから 2 シリング、ブドウの木から 4 ペンス」 - アビンドン修道院会計簿、R. E. G. Kirk による。

§ 1483 - 4 年 「庭師の会計係 'scaccarium' (=exchequer)に隣接している小さな溝とともに、庭園をぐるっと囲む大きな溝の清掃に 18 ペンス。(1516 年の記載には、「会計係にガラスの窓を作るのに 20 ペンス」とある)

|| アビンドン、1450 - 1 年 : 「魚を集めてある堀の魚を捕まえるためのネットの購入に 4 シリング 10 ペンスおよび養魚池の魚の生け簀 tronke 1 つに 3 ペンス」 Et in welez emptis pro piscibus capiendis in fossato conventus 4s. 10d. et in facture unius tronke pro piscibus custodiendis 3d.

修道院の庭園の管理の詳細について知るためには、その部署の会計簿を繰り返し見るとともに、この問題のビジネス面全体を見なければならないが、そのあまり、別の側面、すなわち庭園がもたらす喜びのことを忘れてしまいがちになる。しかし、何ということか！現存している庭園の中で、これらの庭園が一体どういうものであったかについて、何かヒントを与えてくれるものは実に少ないのである。分厚い生垣や養魚池だけが残っているのが一般的である。アシュリッジ Ashridge の庭園のコーナーを囲っている壁は古い回廊の一部であり、その近くには分厚いイチイの生け垣で囲われたもう一つの小さな庭園もある。これらの庭園は、ここが修道院であった当時とまったく同じ、ということではないにしても同じ流れに沿っており、修道士たちが世俗から離れた回廊中庭の世界を楽しんでいた日々からずっと変わらずに庭園として維持されてきたものである。



[図 1 - 4] アシュリッジ

同じようにニューステッド大修道院 Newstead Abbey の庭園には、ここに長年暮らしていた「黒衣托鉢修道士」Black Friars たちの楽しい痕跡が今もなお多数残されている。私たちが見ているこの時代は絶え間ない争いの時代であり、回廊中庭だけが、静けさと隠遁が許される唯一の場所であり、そして壁の内側に逃げ場所を求める人々にとっての唯一の場所であった時代には、庭園の中で過ごす平和な時間がどれだけ愛おしいものであったかと思われる。おそらくソップウェル Sopwell (セントオールバンズ大修道院の一室) の住

人たちは早朝あるいは夕方遅く庭園を散歩することを大いに楽しんでいたので、ミカエル大修道院長（1338年頃）は規則を定め、冬には「庭園のドアは、朝の聖務日課、すなわち最初のお祈りの時間前には（散歩のために）開けてはならないこと；そして夏には庭園と応接間のドアは朝9時までは開けてはならないこと；curfew 晩鐘 curfew]が鳴ったらドアは必ず閉めなければならないこと」とされた*。

*ピーター・ニューカム師『セントオールバンスの歴史』468ページ Rev. Peter Newcome, *History of St. Albans*



THE EAGLE OR MIRROR POND, NEWSTEAD ABBEY.

So named from the clearness of the reflections, and from a brass eagle lectern containing the papers of the monastery having been found there in the 18th century. The size of the pond is 212 feet long by 104 feet wide. There is a flight of stone steps descending into the water at each corner. (See page 99.)

[図 1 - 5] ニューステッド大修道院 鷲池・鏡池

（この名前は反射の鮮明さと真鍮製の鷲の聖書朗読台に由来。朗読台にはこの修道院が18世紀にここに創設されたことを示す書類が納められていた。池の大きさは長さ212フィート、幅104フィート。各コーナーには水の中に降りて行く石の階段がある。90ページ参照）

戦闘的なホスピタル騎士団 Hospitaller Orders [第1次十字軍遠征の際にエルサレムで傷病者の加療のために結成されたヨハネ騎士団の団員]、テンプル騎士団 Templars、セントジョン騎士会 Knights of St. John ですら、園芸の改良にいくばくかの貢献をなした。十字軍の東方遠征の間、彼らはイングランドの庭園のことを覚えていたのであろうか、そのための植物を持ち帰った。たとえば、リブストン Ribston の素晴らしいスズカケノキ *Oriental plane* [*Platanus orientalis*] はその一例であり、それを植える伝統はテンプル騎士団のおかげとされている。これらの騎士団に属していた王国全体にわたる荘園の調査によると、その庭

園の多くのものが騎士団の所有であった。イングランドにおけるエルサレム・セントジョン騎士会の事務局、それはクラークンウェル Clerkenwell にあったが、そこにはフィリップ・ドゥ・テム Philip de Thame 修道分院長の時（1338年）の庭園があり、ヘンリー7世 [在位 1485～1509年] の時代にもなお存在していた（†ヘンリー7世王室行政文書、西暦 1486年 Close Roll, Henry VII）。またホスピタル騎士団も同じくハンプトン Hampton に、庭園付きの家を所有しており、そこはハンプトンコートの中の庭園がある場所であった*。このような騒然とした時代を通じて、多くの方法で、修道院的な規律が園芸という科学を維持し、またその知識を周辺へと広めていった。そして実際にやってみせることで、お説教とあわせて、実用的な生活を通じて「働くことは祈りであること」を世に示したのであった。

*エルサレム・セントジョン騎士会およびテンプル騎士団、そしてシトー修道会も、庭園の10分の1税を免除されていた。 - フラー『教会の歴史』